

から一般に興味を興へると思ふ點について要領をせう出しながら、自分の考をもつけ加へて見やう。

発掘の動機といふのは、この地方でよくある例であるが一九一二年、一人の坑夫が北方蒙古に金鑛を掘り歩いて、土積や坑穴のあるのを見つけたので、これをむかし金を採掘した跡だと考へて、探りのシャフトを坑中に投じて見た結果、種々の遺物を得、その中の一部分はイルクーツクの博物館に送られ、一部分はその後坑夫の寡婦の手から、コズロフ探検隊の人々に賣却したのに由るのである。これによつてこの場所が重要な墓地であると考へられて、注意をひくことになり、コズロフ氏はこの付近の似寄りの場所から、大小十ヶ所を選んで發掘を試みることにした。これに従事したのが前述の一九二四年二月から翌年二月までのことで、實際組織的に發掘されたのはその中の一ヶ所に過ぎず、その他は氣候などの關係上、思ふ通りの作業が出来ないで、たゞシャフトを用ゐて探索するに過ぎなかつた。

さてこの墓地の位置は庫倫の北方約七十マイル許り、ノイン・ウラ山脈の樹木の茂つた坂であつて、そこには總計二百十二に上る古ふんの群があちこちに散在して居るとのことである。惜しいことにはこれ等のふん墓については、構造その他一般的の記述は、イエッツ氏によつては略せられてしまつて居るが、コズロフ氏の報告には委細記されて居るとのことである——コ氏の露文の報告も近頃英佛等の書店で賣さばかれてゐるから、これを見得るのも遠くはあるまい——たゞ氏のいふところによつても、これ等の墓の中には棺の納まつて居る室が深さ三十フィートにおよび、棺室の外側には更に木造の室があつて、両者は美麗な織物で裝飾した廊下で相通するやうになつて居る